



シェリング芸術哲学における構想力

八幡, さくら

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6013号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006013>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要約

論文題目

シェリング芸術哲学における構想力

氏 名 : 八幡 さくら

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 松田毅 教授
(副) 嘉指信雄 教授
(副) 長野順子 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

「構想力」(Einbildungskraft)とは、一般的には、何らかの像を心の中に思い浮かべる能力を意味する。近代において、カントがこの構想力を人間の認識に関わる心能力であり、美の判断に関わる能力であると考えた。これに対して、ドイツ観念論の哲学者の一人である F・W・J・シェリング(1775-1854)は、構想力によって神の創造性に類似した芸術家の創造能力を説明し、さらに構想力を自然哲学における力の概念に関わるものとして解明しようとした。シェリングは、1800年から1807年にかけて芸術哲学という芸術に関する哲学的な議論を著作や講義で発表している。その中でシェリングは、構想力に、没意識的なものと意識的なもの、自然と自由といった、対立する事物を総合し、芸術において作品に美を現す役割を担わせる。シェリングにとって、自然と自由とは根源的には同一なるものであり、差異として現れた事物である。自然と自由を最終的に再び統合し、外的に美を現わす能力としての構想力は、芸術哲学のみならず、それ以前のシェリング自然哲学や同時期の同一哲学においても不可欠な役割を担っている。

ただし、これまでのシェリング芸術哲学の研究史において、構想力に関する研究は多いとは言えない。その理由として、シェリング哲学内部における芸術哲学の位置づけの問題が挙げられる。シェリングは自身の哲学的立場をしばしば変えるため、その立場の一貫性が常に問題視されてきた。芸術哲学は1800～1807年の一時期のみに論じられた哲学であり、それ以後シェリングが芸術に深く言及することはなかった。また、芸術哲学が論じられた期間は同一哲学期と時期を同じくし、同一哲学的立場を取る。これらの理由から、シェリング哲学全体の発展から見れば、芸術哲学は一時的な解決に過ぎないとする見方が優勢であった(z.B., Schulz 1975)。しかし、その一方で、芸術に対する意識やその重要性を後期の神話論にも見出す研究もある(Jähnig 1966 u. 1969)。筆者は、シェリングにおいて、芸術に関する問題意識は前期から後期まで形を変えて継続されているとみなし、その鍵概念となるのが構想力であると考ええる。

これまでのシェリング芸術哲学の構想力概念についての研究は、大きく三つに分けられる。まず、バルトに代表されるような、原像と写像の二世界論として理念と芸術作品の関係を把握し、芸術における構想力の弁証法的なプロセスを見出す研究がある(Barth 1991 u. Beierwaltes 2004)。次に、シェリングの構想力とファンタジーの区別をロマン主義の構想力概念との思想的連関において解明する研究が挙げられる(Engell 1981, Küster 1979 u. Frank 1989)。さらに、近年カント・フィヒテの構想力概念とシェリングの構想力概念との思想的影響関係を指摘し、自由と必然性を同時に実現する能力をシェリングの構想力概念に見出す研究が登場してきた(Loock 2007)。これらの先行研究を踏まえ、筆者は本論文において、シェリング芸術哲学を理論と作品分析の両面を備えた議論として提示する。そして、この両面性を支え、芸術の産出に働く構想力概念に着目する。

本論文では、芸術哲学を中心に自然哲学と同一哲学の著作も対象としつつ、1) カント哲学の構想力

との比較、2) 自然哲学との関係、3) 芸術哲学の具体的側面の検討、という三つの柱を中心に据えて、シェリングの構想力概念を検討する。

1) まず、シェリングの構想力概念の背景にあるカントの構想力を、シェリングがいかに受容して展開していったのかを検討することで、シェリングの構想力の独自性を明らかにする。具体的には、はじめに議論の土台として、シェリングに関わる構想力の概念史をまとめる(第Ⅰ部第1章)。そして、シェリングの『芸術の哲学』において示される、神の創造性と類似する芸術家の構想力について、バルトの議論を手掛かりに検討し、構想力の内部に多と一を繋ぐ二方向の動きを見出す(第Ⅰ部第2章)。

続いて、カントの『判断力批判』の美感的判断と天才についての議論を、シェリング芸術哲学の美的直観と天才論と比較する(第Ⅱ部第1章)。そして、構想力と関わる図式と象徴概念に着目して、カントの『純粹理性批判』の図式論と『判断力批判』の象徴論から、シェリングがいかにして図式・アレゴリー・象徴という三分法を展開するに至ったのかを検討する(第Ⅱ部第2章)。このカントとシェリングの比較研究により、シェリングの構想力概念にカントの構想力と類似する超越論的な機能と美を産み出す作用を見出すことができた。それとともに、カントが主観的な感情に基づく美感的判断力によって美が捉えられるとするのに対して、シェリングは、美的直観という客観化された知的直観を働かせることによって、主観を越えた客観の側へと美を産み出し、それを直観可能とした。このことから、シェリング芸術哲学は、美の客観的実在性を認めうるという点において、カント美学の立場から明確に区別される。さらに、カント美学の受容的側面とシェリング芸術哲学の制作的側面を比較し、制作的側面に留まらないシェリング芸術哲学の議論の示し、制作と受容を同じ創造の両面性として捉えられるという解釈を示す。

2) 筆者は、芸術において構想力が働く場合、その過程にはバルトが指摘するような弁証法的プロセスが見出されるが(第Ⅰ部第2章)、それだけではなく、構想力には自然哲学由来の階層構造を示す類比概念たる「ポテンツ」概念が関わっている(第Ⅲ部第1章)。このポテンツ概念は、『体系』において、主観から客観の側へと展開していく自己意識の歴史とともに働く。そのため、自己意識の歴史は、展層化していくポテンツ概念に基づく「構想力の歴史」として言い換えられる。さらに、この構想力たる芸術の産出性の源には自然の産出性があるということを、『体系』から読み解く(第Ⅲ部第2章)。そして、自然と芸術の関係性は、『芸術の哲学』を経て、『造形芸術の自然に対する関係について』で詳論される。このようなシェリングの自然哲学の力と関わる構想力概念こそが、芸術哲学において示される作品創造の根源にある、ということを明示する(第Ⅲ部第3章)。自然という意識以前のもの、つまり没意識的な側からの呼びかけによって、芸術家は作品の創造へと向かい、完成された作品において、意識を越えた没意識的なものを再び付与する。自然を後に残して発展していった精神は、芸術において再びその自然

へと回帰するのである。このように、芸術哲学は、自然と精神の連続性、自然の産出性といった自然哲学の根本思想を自身の哲学体系の中に取り込み、理論を展開していく。それゆえ、芸術哲学は自然哲学を内包しており、自然は芸術の内部でその創造能力を基礎づけ、生气づけるものとして働いているのだと結論することができる。

3) 芸術哲学の具体的側面に関しては、近年 A・ツェルプストが、シェリング芸術哲学とくに造形芸術論が、シェリング自身の芸術作品の経験に基づいて構築された芸術理論である、ということを実証的に解明している(Zerbst 2011)。このようなシェリング芸術哲学の具体的側面は、芸術哲学が思弁的なものにとどまらず、その理論の応用可能性を作品分析において示すことへと繋がる。本稿では、特に 1798 年のドレスデン絵画館訪問を中心に芸術体験を再構成する(第 IV 部第 1 章)。そして、それらの経験とポテンツ概念に従って形成された芸術ジャンル論と、各芸術ジャンルに対するシェリングの評価を検討し、その内部にある歴史性の問題を考察する(第 IV 部第 2 章)。そして、本論文の最後の部分では、造形芸術の一ジャンルである絵画に関する議論を取り上げ、シェリング芸術哲学の理論の作品分析への応用可能性を検討する。筆者は、シェリングの造形芸術論において、芸術家と鑑賞者の両者の構想力の活動に共通する創造性を認めうると考え、とくに近代に優位なジャンルとしてシェリングが挙げる絵画論に注目する。まず、シェリングの絵画論から読み取れる構想力の働きとその本質を示し(第 IV 部第 3 章)、次に、シェリングによる絵画作品の分析を再検討し(第 IV 部第 4 章)、最後にこれまであまり評価されてこなかった風景画論を取り上げ、そこで論じられる自然と芸術の関係を『芸術の哲学』と『造形芸術の自然に対する関係について』から読み解き、風景画の受容美学的側面を検討することで、芸術家と鑑賞者との共通する構想力の創造活動について検討する(第 IV 部第 5 章)。このことは、第 II 部で指摘した、カント美学とシェリング芸術哲学との比較によって見出された、受容論的側面と制作論的側面の検討に対する再考察の試みでもある。この議論を通して、鑑賞も二次的な創造過程であると筆者は主張し、想像的な構想力の働きを芸術家と鑑賞者の両方に認められるということを結論する。

以上の三つの観点に基づいて、シェリング芸術哲学を、理論と具体的な作品分析の両面から総合的に議論することによって、従来のシェリング哲学研究に欠けていた観点を補完できる。それとともに、シェリング芸術哲学の構想力が、芸術家と鑑賞者の両方に共通する創造活動を担う働きである、と主張することによって、構想力概念の新しい役割を見出し、シェリング芸術哲学に対する新たな解釈の可能性を示す。本論文は、シェリング芸術哲学研究の新たな側面に光を当て、さらなる研究の可能性に展望を開く。